

長崎貿易と

ジョアン末次平蔵vsアントニオ村山当安

背教者たち

桐生敏明



はじめに

長崎代官末次平蔵（政直）といえど同地における切支丹迫害の元凶ともいふべき存在でした。ドミニコ会士オルファネールは、長崎でおこなわれた多くの拷問、教会の破壊には「すべて平蔵が関係している」と、その迫害者ぶりを指摘しています。しかし、その平蔵もかつてはジョアンの洗礼名を持つ長崎における切支丹の柱石的存在だったのです。父は末次興善——彼は善良な切支丹として、また裕福な博多・長崎の商人として一生を終りました。しかし平蔵はこの二つをそのまま引き継ぐことは出来なかったのです。富とキリスト教——かつて長崎においては、この二つは矛盾することなく結びついていました。それは長崎貿易の主体がポルトガルとの関係であり、イエズス会との関わりを抜きに貿易という事が考えられなかったためでもあります。当初は切支丹になるということは長崎貿易参加へのパスポートをも意味したのです。しかし今や禁教・迫害の時代を迎え、長崎の切支丹たちはこの二つの選択にせまられました。富を棄て命を葉てる者もあれば、キリスト教を棄てた者もあります。前者は殉教者として聖者や福者に列せられ、後者は背教者としてユダのレッテルを貼られたのです。

そして平蔵は長崎代官の職を代償に、この背教者の道を選んだのです。

※1867年7月7日、教皇ピオ九世によって福者として発表されたのは、1617年から1632年にわたる16年間、205名におよぶ日本教会の殉教者であったという。（ディエゴ・パチェコ著、佐久間正訳「鈴田の囚人」）

末次平蔵と木村一族

1550（天文19）年、フランシスコ・ザビエル等一行が松浦領平戸に上陸しました。

さて、ザビエルが初めて日本の土を踏んだのはこの前年1549年のことです。日本人青年アンジロー（弥次郎）に導かれ鹿児島に上陸したザビエルは、一年この地で布教活動に従事しました。しかし当初の期待は島津貴久の冷遇もあって、充分報いられることはありませんでした。翌50年、ザビエルは希望を都へとつなぎ鹿児島をあとにします。そして都への途上、この平戸へ立ち寄ることとなったのです。おりからこの地に初めてのポルトガル商船が入港しており、ポルトガル貿易を重視した松浦隆信は、このためザビエル等一行をも盛大に歓迎することになりました。ザビエルは言います。

「そこ（平戸）の領主は、私達を大いに歓迎した。其処に居ること暫くにして、住民の数百名が信徒となった」と。

さて、この改宗の中心となった人物が松浦氏の家臣木村氏です。彼はザビエル平戸滞在中の宿主であり、平戸における最初のキリスト教改宗者でした。それはおそらくキリスト教界にとって、日本における最大の収穫の一つではなかったでしょうか。なぜなら、のちにこの一族からは、日本人として最初の司祭に叙せられるセバスチャン木村が誕生し、更にアントニオ木村、レオナルド木村、マリーア木村デ村山など数々の模範となるべき切支丹が生み出されたからです。彼らはいずれも名誉ある殉教をとげ、日本における他の殉教者とともに、1867年（慶応3）教皇ピオ九世によって福者として世界に発表されました（レオナルド木村は1619年11月18日に、アントニオ木村も同年11月27日に、またセバスチャン木村とマリーア木村デ村山については1622年9月10日にそれぞれ長崎において、火刑もしくは斬首によって殉教したことが伝えられています）。

イエズス会士ジロラモ・マヨリカは言います。

「木村一族は彼らの信仰の師父聖フランシスコ・ザビエルの英雄的な徳からそれることのない子孫だけを生み出すようである」と。

しかし彼の言に反して、その同じ木村氏から後に背教者となり迫害者となる末次平蔵が登場してくるのです。平蔵と木村氏との関係はキリスト教界側の史料の中にしばしば顔をのぞかせます。例えば一六一九年の「イエズス会年報」にはアントニオ木村の殉教に触れ、その中で彼アントニオが「レオナルド木村の親戚であり、末次平蔵の従弟」であると紹介していますし、またドミニコ会士オルファネールも、このアントニオ木村と平蔵の関係について次のような興味深い記録を残しています。

「（長崎奉行長谷川）権六はアントニオ木村が平蔵の従弟でありかつ平蔵は彼の釈放を願い出たので」権六は「平蔵が願い出ているのを考えよ。転べば釈放するであろう」とアントニオに説得を試みました。しかし彼は「デウスの御助により、私は正気の間は決してそんな罪深い不名誉なことは致しません」と、殉教の道を選んだというのです。

また村山徳安アンドレスの殉教を伝えるパードレ・モラーレスの書翰には、アンドレスの妻「マリーア夫人」即ちマリーア木村デ村山について次のように記されています。

「長崎代官（村山当安）の息子（徳安）の妻であり現代官（末次平蔵）の姪であって、あれほどの名誉と栄華の中で生活していたのに、いま彼女が夫のいない甚だしい貧困に満足していること、ただ神の御恵みによってこの苦しみを容易に耐えていることは確かに人々の大きな驚きとなっ

ています」と。

更にアルバレス・タラドゥリース氏もセバスチャン木村について、彼が「殉教者レオナルド木村S・J、アントニオ木村、マリーア木村デ村山（中略）、マリーア木村デ村山の叔父・養父であり棄教者・迫害者たる末次平蔵ジョアンの親族である」ということを指摘されています。

では平蔵と木村氏の具体的つながりは何でしょうか。1614年、平蔵自身が述べたところによれば「彼の祖父は自分の家に宿泊させていたパードレ・メストゥレ・フランシスコ（ザビエル）に洗礼を受けた。75歳になる彼の母も、誰によってか記憶していないが、種々の事情から考えておそらく同パードレ・メストゥレ・フランシスコによって受洗した」と。つまりザビエルの宿主となった木村氏は、平蔵の祖父にあたる訳で、そして平蔵の父とは先にも述べた博多の商人末次興善なのです。しかし、ここで見るかぎり、平蔵は興善の受洗については触れていません。もし興善がこのとき受洗していないとすれば「木村が家族全部と一緒に洗礼を受けた」という記録に矛盾します。とすれば、おそらく興善はこのとき、すでに平戸には居なかったのではないのでしょうか。

興善は博多の末次家に養子に入り末次興善を名乗りました。いつの頃であったかは判然としませんが、このような事情や、ザビエル来島当時、興善は既に30歳前後であったということから考えて、このときにはもう末次家に入っていたとも考えられます。いずれにせよ興善は、木村氏とは別の機会に受洗したのでしょう。彼は洗礼名をコスメといい、コスメ・コーゼンの名で、これ以後フロイスの『日本史』の記述の中にもしばしば登場することとなるのです。

※松田毅一・川崎桃太訳「フロイス・日本史2」によれば1590年12月「善良なコスメ・コーゼンは七十歳を越している」とあることから、ザビエルが平戸を訪れた1550年には彼が30歳前後であったことが推測されます。

コスメ末次興善

コスメ・コーゼンの名がフロイス『日本史』に最初に現われるのは、1565年（永禄8）のことです。興善は45歳前後であったと思われます。このときイルマン・ルイス・デ・アルメイダは病の身を堺の日比屋了慶の屋敷に休めていました。その病も癒え、明日は河内の国、飯盛へ旅立とうというとき、了慶は別れの茶会を催すことを決めたのです。フロイス『日本史』は言います。「その翌日9時に、彼（了慶）は、私（アルメイダ）と一日本人いるまんと、またもう一人、日本で何くれとなく我々の用事を世話してくれくれる男で、コスメ・コーゼン Cosme Cojenという、富裕で、たいそう善良なキリシタンに口上を伝えてよこしました」と。

この二年後、即ち1567年、フロイス『日本史』はやはり堺においてですが、コスメ興善が憐れな捨子を野犬から救ったことを伝えています。このあと興善に関する記述は途絶え、再びその消息が知れるのは11年後、1578年（天正6）のことです。

この年、切支丹大名大友宗麟は島津征討軍をおこし、耳川で決戦におよびますが、逆に惨めな大敗を喫しました。この敗報は宗麟治下の博多にも入り、町はときならぬ混乱状態に陥りました。博多在住のイエズス会パードレ、ベルシヨール・デ・モウラ及びバルタザール・ローペスは、この混乱を避け秋月へ逃げることを決しました。そしてその避難途上「彼等は博多で彼等の保護者であったコスメ・コーゼンに逢った」のです。

秋月に入った宣教師らはそこでも多大の困難にぶつかることとなりました。秋月種実が大友氏に叛旗を翻したのです。宣教師らはたちまちその保護を失い、生命の危険にさえさらされることとなりました。そこで彼らの苦難を救ったのが、他ならぬ末次興善です。彼は「秋月（殿）に働きかけて、ぱあで私たちを迎えて保護を加えさせ、これによって彼等は自由を与えられた」のです。

末次興善はこのあと1590年（天正18）にもこの秋月に姿を現わしています。それは恐らくフロイス『日本史』に登場するコスメ興善の最後の姿でしょう。

この年インド副王使節の資格を以って巡察師バリニャーノ一行が長崎に到着しました。彼らは豊臣秀吉に謁見すべく、ただちに長崎をあとにしましたが、その一行を博多の近く秋月で出迎えたのがコスメ末次興善だったのです。

「（彼らが秋月に）着くと、（一行は）コスメ・コーゼン Cosme Cojenという古くからの優れたキリシタンの老人に迎えられた。彼は博多の町の非常に重立った人で、名望ある多くのキリシタンの息子たちの父である。本来の主な家は博多にあるが、（その他）諸所にも家を持っている。その多くの家の一つは秋月にあり、そこで彼は（先に）秋月（種実）殿からはなはだ挙用されたのであった。」



秋月の風景

※「村山当安に関するヨーロッパの史料一」中、アルバレス・タラドゥリース氏はその（註）において彼興善に関し「各地に多数の家を有し」「また堺にも家があり、その地で彼の数寄屋は有名であった」と述べておられる。

今こうして、フロイス『日本史』の記事中から、末次興善に直接関係するものを拾い出し並べてみました。これら一連の記事を読むとき、我々は、善良な切支丹としての興善の姿を思い描くことができると同時に、また末次氏初期の活動範囲をもほぼ推測することが可能でしょう。それは概ね堺と博多を結ぶルートでした。中世末から近世初頭にかけて、博多は対馬～朝鮮を結ぶ重要な貿易港でした。しかし博多はその膨大な輸入品を捌く消費都市を後背地として持ちません。そこで京都という一大消費都市を後背地として持つ堺との連繋が必要となってくるのです。末次興善の屋敷が「諸所」にあり、その一つが堺に在ったというのも当然のことかもしれません。ところがこれから約百年後『元禄二年堺大絵図』には、既に末次氏の名を見付け出すことはできません。それどころか、末次興善が堺に居たという記録は、フロイス『日本史』以外には皆無なのです。例えば『今井宗久茶湯日記書抜』にも、また『天王寺屋会記』にも興善の名は登場していません。それは末次氏の当時の商業活動がそれ程大きな影響力を持たない、言いかえれば、やっと頭をもたげてきたばかりの新興商人のそれではない、ということをも物語っているとも言えましょう。

※興善がいつ長崎へ進出したかは明らかではない。ただ、長崎が開港したのが1571年であり、秀吉が長崎を収公したのが1588年、恐らく興善の長崎進出はこの20年たらずの間のこと、しかもかなり早い時期のことであったと考えられます。なぜなら秀吉が長崎を天領としたとき、既に市街を形成している26町に対し地子を免除したが、この中に興善町もまた含まれていたからです。金井俊行編「増補長崎略史」第十巻

しかし末次家も平蔵の代となり、長崎貿易に携わるようになると、末次氏の名は急速に当時の商業活動の表面に躍り出てくることとなります。例えば1592年（文禄元）、豊臣秀吉は初めての海外渡航朱印状を発給しましたが、これには、

長崎ヨリ五艘

末次平蔵 二艘

船本弥平次 一艘

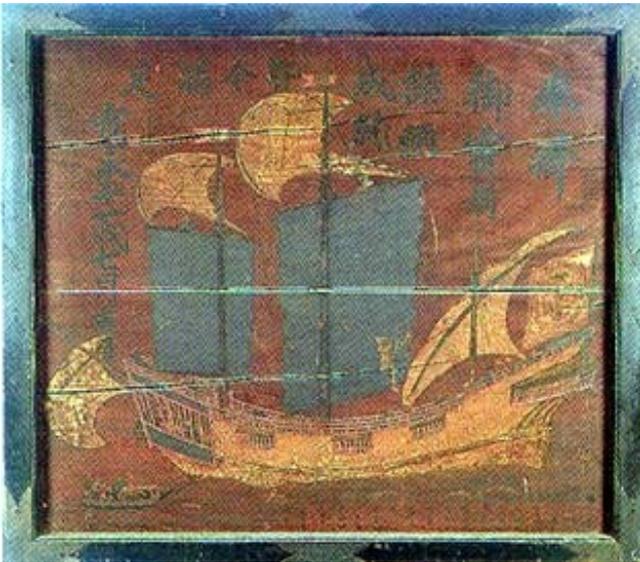
荒木宗太郎 一艘
絲屋随右衛門 一艘

京都ヨリ三艘

茶屋四郎次郎 一艘
角倉 一艘
伏見屋 一艘

堺ヨリ一艘

伊予屋 一艘
以上



長崎市春徳寺にある末次家の墓所

とあって、この年発給された朱印状九通のうち、5通までを長崎在住商人が得ており、しかも内2通が末次平蔵に宛てられたものであることがわかります。長崎貿易を背景とした末次氏の台頭ぶりが窺えるというものでしょう。しかし、かといって、この末次氏の隆盛をもたらしたのが、平蔵一人の力に依るというのでは決してありません。むしろその土台を築きあげたのは、平蔵の父興善の活躍によるところが大きかったでしょう。

当初、末次氏の発展は対ポルトガル貿易にかかっており、そしてこれは次の二つの柱に支えられていました。一つはイエズス会との関係であり、今一つは新たに開港した貿易都市長崎との関係でした。興善は切支丹となることによって対ポルトガル貿易に有利な地位を占め、更にポルトガル貿易のために開かれた長崎へ逸早く進出し、その地に興善

町を興すなどして町の発展に寄与し、長崎の町政に少からざる発言力を有するようになったのです。

そして、末次平蔵の活躍もこの土台のうえにあってこそ、初めて可能になったといえるでしょう

。因に平蔵の誕生は、長崎開港に遅れること2年、即ち1573年（元龜4）のことでした。以後、末次氏は衰退の途を歩む堺を棄て、新興貿易都市長崎の商人として次第に頭角をあらわしてくるのです。

鵜呑みにすることもできません。というのは、当安の長崎代官就任にはイエズス会が関係していると思われるふしがあるからです。このことを確証する史料こそありませんが、次の事実は、これを類推させるに充分でしょう。当安が長崎乙名たちの依頼を受け、肥前名護屋在陣中の秀吉を訪ねた年、即ち1592（文禄元）年、イエズス会士ジョアン・ロドリゲスがやはり秀吉のもとを訪ねているのです。しかもこの年入港したポルトガル船船長を伴っての謁見であり、日本巡察師バリニャーノの指図によるものでした。このことの意味するところは大きいと思われま

す。これより四年前、秀吉が貿易と布教の分離を謀り、世にいう伴天連追放令を発しましたが、このときイエズス会は報復措置として、ポルトガル船に対し長崎渡航中止を勧告しました。以来ポルトガル船の来航は一時途絶え、秀吉はイエズス会とポルトガル貿易の切り離せざることを否応なく思い知らされたのです。そこへ巡察師バリニャーノがインド副王使節として来日しました。秀吉はイエズス会の布教活動を黙認せざるを得なかったでしょう。そして、これまでの方針を一変し、イエズス会パードレを貿易の仲介者として利用することを考えたのです。

ここに登場してくるのが滞日十余年に及ぶというイエズス会士ジョアン・ロドリゲスです。彼はバリニャーノの通訳として秀吉に謁しましたが、秀吉はこのロドリゲスを厚遇し、彼に対し頻りにポルトガル船の来日を要請したのです。そしてロドリゲスは、この秀吉の意向に応えるかのように、ポルトガル船船長を伴い肥前名護屋に秀吉を訪ねました。秀吉にとっては、貿易と布教の不可分を今一度見せつけられたようなものであり、それだけに貿易仲介者としてのイエズス会を意識しない訳にはいきませんでした。

村山当安が長崎外町代官に任ぜられたのも、やはりこの同じ年の出来事なのです。イエズス会士フランシスコ・ヴィエイラは言います。

「長崎市に当安アントーニオと称するキリシタンがおりました。貧しい生まれではありましたが、秀れた能力とキリシタンらしい行ないをもっていましたので、イエズス会はこの者を庇護しました。彼はその援助によってこの市の主要なキリシタンたる代官の一人になるに至りました」と。

つまりイエズス会は、熱心なキリスト教信徒を長崎代官にすることによって、貿易のことや長崎町政のこと、更には長崎貿易をめぐる様々な政治・経済関係にまで有利な地位を獲得しようとしたのです。その証拠に、秀吉没し政権が徳川家康に移るや、イエズス会パードレ、ジョアン・ロドリゲスは、この当安を伴い年頭の挨拶として家康を訪ねました。それは、秀吉以来の長崎代官の職を当安に対し引き続き安堵してもらうためでした。要するに、イエズス会は「長崎代官」としての村山当安を必要としたのです。ときに1603（慶長8）年、当安41歳のときのことでした。

※「村山当安に関するヨーロッパの史料」「鈴田の囚人」などにより、当安の誕生が一五六二年、また平蔵の誕生が1573年であることが知れます。また、その名について、当安は「等安」とも「東安」ともまた「東庵」とも書かれています。岩生成一氏は中国側史料に「等安」と記されることが多いことを述べ「当時一般に等安なる文字を充てゝ常用し、恐らく彼自身も此の署名を用ひた」とされています（「村山等安の台湾遠征と遣明使」）。

これに対しアルバレス・タラドゥリース氏は、イエズス会トレード文書館第九九一束、第14葉裏に「村山当安安当仁与 Murayama Toan Antonio」と自筆の署名があることから「当安」の文字を妥当として採用されています（「村山当安に関するヨーロッパの史料」）

当安とイエズス会の対立

ところで、当安とイエズス会の蜜月期間はそう永くは続きませんでした。当安はやがてイエズス会から離反していくのです。なぜでしょうか。フランシスコ・ヴィエイラは、当安の道徳的墮落がその唯一の原因であるとしています。ではイエズス会自体には原因がないのでしょうか。この頃イエズス会は、布教資金捻出のため、生糸を中心とした長崎～マカオ間貿易に深く関わり、ついには本末転倒し利潤を追求するに急となり、キリスト教布教団体としての枠を大きく踏みはずすようになってしまっていました。しかもイエズス会は、この貿易に関係する日本人の商業活動を、キリスト教という枠で大きく制限したのです。このため、その取引について「望み通りの生糸を入手出来ない」日本商人たちの不満が常に存在したのです。さらに、この長崎～マカオ間貿易の全般にわたって、日本人とポルトガル人の仲介にたち、終始大きな指導力をふるったパードレ、ジョアン・ロドリゲスは「しばしば法外な糸値段をつけたらしく、宣教師ですらそのやり方を適切でない」と指摘した程であり、加うるにイエズス会は、当安を利用して長崎町政まで関与しようとしたのです。

当安のイエズス会離反も、このようなイエズス会の行き過ぎた商業活動が原因しているのではないのでしょうか。当安にとってイエズス会は、いまや単なる商業上のライバルでしかなくなっていました。ためにこれ以後当安は、イエズス会商業活動の中心的存在である、パードレ、ジョアン・ロドリゲスの日本追放を画策するようになるのです。例えば当安は、ロドリゲスが貞潔の誓願を犯したと言いたてこれを陥れようとしていますし、またイエズス会を危険な存在として機会あるごとに、長崎の主要な人物や「王宮の重要人物たち」に説いてまわっているのです。

「諸パードレに騙されないようによく注意なさい。そして神などは存在しないし、すべては生命と共に終ることは確かであると考えなさい。パードレが霊の救いがあるといっているのは全くの偽りであり、パードレ自身もそれを知っているが、この方法によって日本をイスパニア国王に服従させるため、彼らの教えに従うように説いているのである」と。

このようにして当安とロドリゲスの対立は次第に根深いものとなり、ついに1610年マードレ・デ・デウス号事件の発生をむかえて更に決定的なものとなるのです。

1609年（慶長14）夏、長崎に入港したポルトガル船マードレ・デ・デウス号に対し、長崎奉行長谷川左兵衛と代官村山当安はその積荷に厳重な統制を加えようとししました。積荷の目録を呈出させ、その商品に対し価格の面その他において、日本人官憲の指揮権を発動しようとしたのです。それはイエズス会の貿易介入を排し、ポルトガル貿易の主導権が日本人にある、という意志の表明でもありました。このため生糸を中心とする積荷の多くが差し押えられ、許可なく荷揚げをすることが禁じられたのです。しかし船長アンドレア・ペッソアは、あくまでこれに反対し、家康に直訴さえほのめかしたのです。

ところでこの前年、マカオにおいて有馬晴信の部下とポルトガル官憲との間に武力衝突がおこり、日本人は暴徒として鎮圧され、その多くが殺されまた捕えられるという事件が発生しました。そして、この事件の鎮圧にあたったのがほかならぬこのペッソアだったのです。

さて当安らは積荷に関する種々の統制が拒否されたと知るや、このマカオにおける日本人騒擾事件を利用して、ペッソアを陥れることを画策したのです。ポルトガル側は、マカオにおけるこの事件を長崎入港後何より早く家康に報告する筈でした。しかし当安や左兵衛は、あろうことかイ

イエズス会を使ってその中止を説得させたのです。

「マカオで殺された日本人たちのことを内府の耳に入れるのは絶対に適當ではない。非常な打撃をうけられ苦しまれるにちがいないし、内府様を納得させるに足る理由も弁明もあろう筈がない」。更にこのことは「決してポルトガル人の利益にはならない」であろうと。

こうしてマカオにおける事件は、ポルトガル人の口からは家康へは知らされないこととなりました。それは結果として、ポルトガル人がこの事件を家康に対し、隠そうとしたかのような印象をあたえたのです。イエズス会は当安らに躍らされ同胞破滅の原因をつくり出してしまいました。次に当安らは有馬晴信にゆさぶりをかけたのです。イエズス会士モレホンは言います。

「この策謀の張本人は左兵衛と等安であった。彼らは有馬殿をこの策謀に引き入れるために、左兵衛は、もし貴殿が家来の殺されたことを遺憾に思わず同盟に加わらないならば、貴殿の家来が日本の外で犯した種々な問題について貴殿を訴えるといって嚇した」と。

晴信はマカオより逃げ帰った部下を連れ、駿府へ赴き、マカオにおける事件の一切を報告するにいたりました。ポルトガル側の報告は左兵衛や当安らによって阻止されており、有馬晴信の報告が一方的に受け入れられ、怒った家康は、ポルトガル船の捕獲・ペソアの逮捕を晴信に命じたのです。事件は既に周知のごとく、デウス号の爆沈という形で結末を見ました。しかし当安のイエズス会に対する攻撃は終わりませんでした。彼は家康の怒りを背景に、日本からイエズス金の立退きをほのめかしたのです。そこで日本管区長パシオは、当安や左兵衛に和解工作进行を講じ、当安らは「ペソア来朝中の行動に関する責任をロドリゲスに帰し、ロドリゲスをマカオへ追放すること、それはイエズス会の決議の結果によると家康に伝えること」。この二つを条件にパシオの和解工作に応じたのです。

おさまらないのはイエズス会でした。当安らにさんざんふりまわされた挙句、デウス号事件の責任をおしつけられ、ロドリゲスをマカオへ追放しなければならなくなりました。しかも、このデウス号沈没で、イエズス会は1万2000ドゥカド相当の生糸を失い、莫大な負債をかかえこむことになったのです。一イエズス会士は言います。

「われわれは想像もできない程みじめな状態に陥った。というのは、維持する財源をもたない許りか、既に2万2000タエルの負債を負っており、しかも毎年さらに負債を重ねていくことになる」と。

平蔵とポルトガル貿易

マードレ・デ・デウス号事件の影響は大きく、イエズス会内部でもこの事件を機に宣教師らの貿易介入批判の声がおこり、1621年、パシオによってイエズス会服務規定の中にハッキリと禁止措置をとることが明示されました（ただし守られはしなかったが）。

しかし最も大きな影響を蒙ったのは日本人、それもポルトガル貿易と密接にむすびついた長崎在住の貿易商人たちではなかったでしょうか。

この頃ポルトガル船は1607年、1608年と日本への渡航はなく、1609年やっと渡来したマードレ

・デ・デウス号も前述の如く爆沈し、このためさらに1610年、1611年とポルトガル貿易は空白状態が続くこととなりました。

ポルトガル貿易によって利益を得ていた者たちにとっては、その痛手はいかばかりだったでしょうか。

ところで長崎という町の性格を考えるに、それは海外貿易—それもポルトガルとの貿易のためにイエズス会が中心となって開いた町でした。1588年（天正16）秀吉によって公領になったとはいえ、ポルトガルとの関係は鎖国まで続きます。しかもその貿易量は鎖国間際までオランダ・中国を凌いでおりました。そして、このポルトガル貿易を背後から支えたのが長崎銀主の存在だったのです。彼らはポルトガル船に多額の投融資を行い、ポルトガル商人らと利害を一にしていました。ボクサー氏によれば、ポルトガル人の日本人に対する貸借関係は既に十六世紀中に始まっていたと考えられ、「17世紀の初25年間」はその最盛期に達したといわれています。

例えば『バタヴィア城日誌』1634年2月19日の条には、「日本の商人たちは（中略）ポルトガル人に迫り、委託金および貸渡金として長崎において払い渡したる金額を精算してことごとく払い戻すことを請求せり」とあって、長崎の銀主が鎖国の完成を目前にして、ポルトガル人負債者にその返済をせまったことが記されています。そしてこの長崎銀主の中に内町乙名・ジョアン末次平蔵がいました。彼は朱印状を得て自ら「安南」や「東京」更には「交址」「高砂」へと貿易船を派遣するほか、このポルトガル船に対しても多額の投融資を行い、言わば長崎貿易全般にわたって大きな発言力を有する存在だったのです。

さて、この平蔵とポルトガル人との関係は極めて緊密で、台湾事件で平蔵とオランダが衝突した際も、オランダ人たちは彼の背後にポルトガル人があるのではないかと勘ぐった程であり、またボクサー氏も平蔵とポルトガルの関係について、「この平蔵は葡萄牙（ポルトガル）人からは、彼等の最も有力な支持者の一人であると思はれていた」と、両者の親密な関係を指摘しておられます。

次の事実は両者のこのような関係をすこぶるよく反映していると言えるでしょう。それは1638年8月23日のことです。二隻のポルトガル船が長崎に入港しました。



「これ等の船には、340人の人々が乗組んでいて、中90人が白人であった。然るに彼等は僅に230

ピクルの生糸を持って来たが、その中150ピクルは長崎代官平蔵のために持って来たもので、残る80ピクルが葡萄牙人自身のものであった」と。

つまり、このポルトガル船のほとんどが平蔵の資本で賄われていたのです。平蔵がいかにポルトガル貿易と密着していたかを察していただけるでしょう。

これとは逆に、長崎代官村山当安は、ポルトガル貿易の主導権を奪おうとして、イエズス会と対立し、あまつさえポルトガル船から一種の関税を強要し、拳句はマードレ・デ・デウス号焼打に見るような強硬措置に出るにいたりました。当安の一連の行動は、見方によれば外国資本に対する商業ナショナリズムの萌芽として捉えることができるかもしれませんが。しかし現実の問題として、当安の動きは、かえってポルトガル貿易で利益を挙げている日本人資本家をも締めつけることとなり、ひいては平蔵の当安に対する敵対感情を生み出す一因ともなったのです。

さてポルトガル貿易をめぐる生じた、この当安と平蔵の対立関係は、これを核として、当時長崎が有していた様々な矛盾を吸着し、長崎全市を包みこむ複雑な様相を呈しはじめました。しかも、このことは逆に当安と平蔵の関係にも反映し、二人の対立を更にのっぴきならぬところまで追いこんでいくのです。アルバレス・タラドゥリース氏は言います。

「末次平蔵対村山当安の争いは、おそらく個人的闘争ではなく、外町と内町即ち長崎の新市内と旧市内の乙名たちの間の一宗教問題を多分に含んだ一競争心の集積であった」と。



黒の僧服がイエズス会士、灰色の僧服がフランシスコ会士

つまり二人の対立関係の背後には、内町と外町の対立があり、更にイエズス会＝ポルトガル系対フランシスコ会・ドミニコ会・アウグスティン会＝スペイン系の対立関係が存在したのです。イエズス会はザビエル以来約半世紀にわたって対日布教権を独占してきましたが、16世紀末から17世紀初頭にかけて、フランシスコ会などスペイン系修道会が盛んにその不当を攻撃し、ついに1608年、ローマ法皇パウロ五世によって全面的にイエズス会以外の他修道会にも日本布教が公許されたのです。このため日本布教の入口ともいえる長崎は、このイエズス会とスペイン系修道会の対立の中心となりました。そしてイエズス会と衝突した村山当安は、このフランシスコ会と結び、ポルトガル貿易と密着した平蔵は、当然イエズス会に協力したのです。しかも二人は、それぞれ外町と内町を代表する人物でした。当安は外町代官として、また平蔵は内町乙名（町年寄）として……。

ところで、当時長崎の町政は、外町については長崎代官が、また内町については「町年寄の合議

」に依っておこなわれていました。しかもこの二つを統轄すべき長崎奉行は未だ長崎に常駐せず、従って長崎奉行といっても「行政の監督機関でありながら、町政面に於ける行政司法権さえ具備していないというような状態でした。つまり長崎は、内町乙名・外町代官という、二つの頭を有する一つの自治都市ともいべき存在であって、互いに他に対しその指導力をおよぼそうと競い合っていたのです。このため次のような関係が成立するにいたりました。平蔵＝内町のグループをイエズス会が支持し、当安＝外町のグループをフランシスコ会をはじめスペイン系修道会が支持するというような。

次の事実はこのような関係を非常によく反映していると言えるでしょう。



長崎市 山のサンタマリア教会跡

1614年（慶長19）、即ち切支丹大追放の年ですが、この年、長崎では禁教令に対抗するかのよう
に連日贖罪の行列が町をねり歩きました。このおりスペイン系修道会とその信徒たちの行列は凄
惨を極め、5月19日には「3千人以上の血の贖罪者の行列が出ました。彼らはかつて見たことも
ない程惨たらしく互いに鞭うっていた」。

そしてこの行列には長崎代官村山当安が家族ぐるみで公然と参加していたのです。これに対し
イエズス会の行列は、かなり見劣りのするものでした。アビラ・ヒロンの『日本王国記』には、
イエズス会の行列の模様を次のように記しています。

「行列の歩き廻った距離は極く短いものだったが、それは町の年寄らが、あの悪魔のような敵が
この上怒らないように、パードレたちに行列を通りへ進ませないでくれと頼んだからであった
」と。

つまり幕府に気兼ねした内町乙名たちがイエズス会に行列を目立たぬようにと依頼し、イエズス
会はこれに応じた訳である。二種類の聖行列を見くらべるとき、内町＝イエズス会と外町＝ス
ペイン系修道会のそれぞれの連繋がそこにあらわれているように思われるのですが。



長崎市 末次平蔵屋敷跡（現勝山小学校）

マードレ・デ・デウス号事件は長崎の町を真っ二つにわける対立のきっかけとなりました。しかし、そればかりでなく、別の面でもこの事件は日本に大きな波紋を投げかけることとなったのです。それは切支丹迫害の開始でした。

さてデウス号を爆沈させた有馬晴信は、その恩賞として「先祖の失った土地、肥前の藤津・彼杵・杵島の三郡」を取り戻せはしないかと、本多正純の家臣岡本大八に相談をもちかけました。大八はこれに対し、本多正純に取次ぐとして運動資金を要求し、これを騙しとったのです。一向にこの進展しないのに業を煮やした晴信は本多正純にこれを報じました。しかし正純はこのことを知らず、晴信は、はじめて己が騙されていたことを知ったのです。ことは家康の耳に入り、岡本大八は駿河の阿倍川原で火刑に処せられました。しかし大八も逆に晴信を訴えていました。デウス号焼打のとき、晴信が長谷川左兵衛（長崎奉行）と衝突し「左兵衛を斬り、長崎を火の海にして自殺する」と洩らした言葉がとがめられたのです。このため晴信も甲斐に流されたのち死罪となりました。問題はこのあとです。家康はこの二人が共に切支丹であったことを知り「日本人にはなし得ないようなことをキリシタンは敢えて行なう」と、切支丹への不信を高めました。更に調べるうち、家康をとりまく側近や侍女の中にさえ切支丹が発見されたのです。オルファネルは言います。「それゆえ、皇帝は大八の死後、キリスト教に対する迫害を公然と開始した」と。

この真偽の程はともかく、デウス号事件にまつわる「岡本大八一件」が切支丹迫害のテコとして家康に利用されたのです。ときに1614年、諸国の切支丹は長崎に集められ、この地からマカオ・マニラへと追放されることに決しました。

「遂に暴君はこの意図を実行に移すことに決意し、修道士ばかりか古くからのキリシタン、敬虔で熱心な協力者、背教したがらぬ日本生まれの女たちまで日本国内にとどまらぬよう命じた。彼らの名前は、ことに都や大坂では名簿に記されていた。その後日本国中のあらゆる資格、身分、

地位の殿たちに、都市であれ町であれ村であれ、領地内にパードレがいたり、その消息がわかったりしたら、ただちに長崎に送るようにとお触れがまわった。殿たちは一言も抗わず、疑いもさしはさまず、防害も反対もせず、その命令を見てから慶長19年の正月というその年の第一の月までにその命令を完遂した」。

さて長崎代官村山当安にとっても、この1614年という年は一つの転換期でした。これまでの当安の生活はと言えば、道徳的に墮落した、およそ切支丹にはあるまじきものであり、イエズス会から離反した原因の一半もやはりこのことによっていると言わねばならないでしょう。アビラ・ヒロンによれば、当安は1612年、女性問題のもつれから一人の若者を殺しており、「その後若者の義父母、妻、10人以上の親族を次々と殺した」と言われ、さらに「しばらく後、何人かの家来たちが彼に悪事を働いたため、7、8人を宮刑に処しその他の者を殺し（中略）また、もう一人の女のことで彼は妻や息子たちと激しく争った」と言われています。彼の妻は「前述の女を力づくでものにしようとする等安に抗ってかばった」のです。

彼の荒みきった生活が目につかぶようです。女のことで部下を殺し、家族と衝突する。およそ彼の生活は、切支丹とは名ばかりのものであったようです。その当安が徳川幕府の切支丹迫害に対し公然と反抗の気構えを見せました。先にも述べたように、1614年、全国の重だつた切支丹達は長崎に集められ、その地よりマカオ・マニラへと追放されることとなりましたが、この事態に直面した当安は、「良心のつまりきになるすべての女たちを、結婚してきちんと暮せるだけの金を与えて家から出し」「家の中の秩序を整え、悔い改めと深い悲しみの心を示して告解し、家に戻って妻や息子たちと和解し」、前述のように家族ぐるみで贖罪の行列に参加したのです。

「彼はおとなしく謙虚で以前とは別人のようにみうけられたから、我々は感嘆し、かくも力強く憐れみ深くまします我等の主に感謝を捧げた」。

このような変化がどのようにして現われたのかはわかりません。ただ、長男トクアン・アンドレスを始め、彼の家族の切支丹としての優れた行ないが確かに当安に影響しているだろうことがほぼ推測されるのみです。

同じ年の11月、約百名近い宣教師及び日本人信徒がマカオ・マニラへ向けて追放されていきました。しかしオルファネールによれば、この内41名の多きが日本残留に成功したといえます。この中には当安の子フランシスコも含まれていました。つまり当安は、このフランシスコを始め九人の司祭を長崎沖で小舟に収容し、再び日本へ潜入させたのです。

だが事件はこれで終わった訳ではありません。再潜入したフランシスコは、大坂の陣に際し秀頼方に与し、切支丹浪人の慰安にあたることとなりました。というのも、秀頼はキリスト教の自由布教を約束していたからです。このため、当安もそのことに関わり、武器・弾薬を大坂方へ運びこんだといえます。しかし大坂方は破れました。

当安のこの切支丹としての一連の行動は、徳川幕府への反抗であり、その発覚は村山一族の滅亡を意味しました。当安は幕府への忠節を証明するため、また自らの地位を高めるため、日・中出合貿易の拠点を確保すべく、自費で台湾遠征を試み、更に遣明使節の派遣を計画したのです。しかしことはいずれも失敗に帰し、今や徳川幕府への功労者としての面は全くなく、禁制の切支丹、しかも大坂方に与した反逆者としての事実のみが残されたのでした。

末次平蔵の背教

1618年（元和4）長崎内町乙名末次平蔵が長崎代官村山当安を幕府に訴え出ました。「年貢納入の不正の件」とも「旧債返還要求」についての告発とも言われますが、ことここにいたって両者の対立は項点に達したかの感があります。長崎関係の旧記にはこの争いの原因を、成り上がり者村山当安の驕慢に対する平蔵ら内町乙名の反発とみるものが多く、川島元次郎氏もこの説を踏襲して「事実は感情の衝突にすぎず、当時の人々も東安の驕愉を憎み、其の滅亡を以て天罰に出づ」と、この事件を単なる私怨として片付けておられます。確かに当安の長崎代官就任後の行状には目にあまるものがありました。

しかし両者の対立は今まで見てきたように単にそれだけのものでは決してありません。その背後にはイエズス会とスペイン系修道会の対立が隠されていますし、また内町と外町の対立が隠されています。次の事実を参考にしてほしいのです。

長崎内町乙名高木作右衛門と町田宗加は、イエズス会のために一つの証言を書きました。1618年3月21日の日付を持つこの証言書には、平蔵と当安の争いに関しイエズス会が一切関わりを持たなかったことが証言されています。即ち「イエズス会の諸パドレが当安アントーニオに不利になるように金銭によって平蔵ジョアンを援助し助言を与えた」という中傷は、「事実に全く反」していると。しかし逆に考えれば、このような証言書を必要とした裏に、イエズス会と平蔵＝内町グループの緊密な関係が一層感じられるのではないのでしょうか。

また、この訴訟事件の期間中、「平蔵を支持する旧長崎（内町）の人々は2000両および將軍、重臣への贈物を無理して」出していると言われていていますし、外町の人々も「（平蔵が）当安から支配権を奪うことを許可しないよう」「署名を付して將軍に訴えた」と言います。

次に事件の経過を金井俊行氏の『長崎叢書・増補長崎略史』によって見ておくこととしましょう。

「嘗て東安の長崎に来るや落魄し末次興善に頼る 代官となるに及び又興善と快からず 元和2年（4年の誤）興善の子平蔵其旧債を責む 東安顧みず終に官に訴へ皆江戸に召さる 對審に及び平蔵辞屈す 即ち東安か大坂に通したる密事を告ぐ 初め東安か子某天主教を修むるに坐し阿媽港（マカオ）に放たる 東安中途に於て窃に之を奪ふ 又去年之を大坂に籠城せしめ又玉葉を輸送せり 是を以て東安は江戸に斬せられ一家13人は長崎常盤崎に磔せられ家亡ふ」

ここで興味深いことは、追いつめられた平蔵が、当安が切支丹であること、大坂の陣で豊臣氏に荷担したこと等を訴えその巻き返しを計ったことです。平蔵は平戸の木村氏を祖とする、いわばザビエル以来の名門切支丹であり、イエズス会との関係も深いものがあります。しかし、にもかかわらず平蔵は当安を訴えるに、切支丹であることをもってその主な訴因としました。当安を切支丹として訴えることは己れの背教をも意味し、それはキリスト教界に対する裏切りをも意味します。事実平蔵は、この事件以後、苛酷な迫害者としてイエズス会をはじめとする日本キリスト教界の前に立ち塞がったのです。ここにイエズス会＝末次平蔵・内町の連繋は断ち切られました。イエズス会にとってはまさに青天の霹靂、信ずべからざることでした。現にパドレ・コースなどは平蔵の背教を信じようとせず、1620年5月、平蔵が自分を捕らえようとしたとき、初めて彼の棄教を認められた程でした。

では平蔵の裏切りの原因は何でしょうか。ただ一つ考えられることは、ジョアン平蔵入信の目的

が宗教問題にはなかったということです。つまりイエズス会が牛耳っていたポルトガル貿易への参加が入信の原因ではなかったか、ということです。1612年（慶長17）禁教令が発せられ、14年には切支丹大迫放がおこなわれ、長崎の諸教会が悉く破却されました。当然、その裏にはオランダ・イギリスの対日貿易開始という事実を見逃す訳にはいきません。このため従来イエズス会がポルトガル貿易の仲介者として大きなウェイトを占めていたものが、禁教令によってその役割が著しく軽減しました。平蔵はポルトガル貿易と結びついていたのであって、イエズス会との関係はいわば方便でしかなかったのです。イエズス会の貿易に占める役割が低下し、切支丹であることが却って不利ということになれば、必然的に背教ということになるのも当然すぎることも知れません。

ところが当安の場合、逆にキリスト教への肩入れが激しくなりました。公然と贖罪行列に加わり、追放切支丹を救出する。拳句はキリスト教の自由布教を約束する秀頼（大坂）方に荷担するという有様です。仮にも長崎を代表する代官が御禁制の切支丹であり、幕府への反逆者であるとしたら、その発覚は一人当安が罰せられるだけでは収まらないでしょう。長崎自体にあたえる影響も大なるものがあると考えられます。これを防ぐためには道は一つ。幕府に露見する前に、内町の乙名たちの手で当安を訴えることです。彼を切支丹として、また反逆者として告発することは、彼らが幕政の忠実な実行者として幕府に迎えられることであり、対立する外町の行政権を獲得することでもありました。

ここに内町乙名末次平蔵と外町代官村山当安の間に公事が取結ばれることとなり、この訴訟の一件は村山家の没落をもたらすこととなったのです。

当安と平蔵の訴訟事件は、これまで見てきたとおり幾つかの要素が絡みあって発生してきています。それはポルトガル貿易をめぐる二人の対立であり、その背後に内町と外町の確執があり、また布教をめぐるポルトガル＝イエズス会とスペイン系諸修道会の対立がありました。これら要素が時々その側面を顕わし、この事件の様相を複雑なものにします。しかし要は長崎という町の徳川政権に対する同化の過程であったと言えるのではないのでしょうか。

これは体制側から見れば、禁教を通じて長崎が幕府の統制下にさらに緊密に結びつけられるようになったことを意味します。幕府は禁教を公式表明しその追放を実施したとはいえ、ポルトガル貿易を意識し、長崎に潜伏した切支丹に対してはその徹底的迫害を差し控えていました。それがこの事件によって、まずイエズス会と内町乙名の連繋が断たれ教会の経済的背景が断ち切られました。これと共に背教者平蔵が新たに長崎代官に任じられ、長崎潜伏切支丹の徹底的迫害が命じられたのです。

※この事件により村山当安は1619年12月1日、江戸にて斬首され、その子供たちもアンドレス徳安をはじめとしてそのほとんどが切支丹として処刑されるにいたりました。（「村山当安に関するヨーロッパの史料二」、朝尾直弘「鎖国」）

最後に疑問が残ります。当安に関する情報を平蔵に流したのは、一体、誰かということです。マカオへの追放者を途中で奪い取り、日本へ再潜入させ、大坂城へ送り届けた事実……当安は隠密裡にことを運んだはずです。このことを知るのはい体誰でしょうか。

平蔵は一人の証人を、平戸の切支丹牢から江戸へ呼び寄せました。それがローマへ留学し、パードレとして日本へ潜入したトマス荒木という人物だったのです。彼は潜入後、捕えられ、拷問に屈し、切支丹であることを捨てました。彼は追放の際、マカオに滞在しており、日本からの追

放者たちをマカオで迎えた一人です。日本では極秘に行われた日本への再潜入計画も、ここマカオでは、それを知る者の口から、幾分、得意げに話されたことでしょう。これから日本へ潜入しようとするトマス荒木にも、そのことはきっと伝わってきたに違いないのです。

1618年、拷問によって背教した荒木は、当安・平蔵訴訟事件の証人として長崎奉行長谷川権六に伴われ江戸へ向かいました。恐らくトマス荒木は平蔵にとって最後の切り札だったのでしょう。彼の背教後の面倒を見たのは、平蔵だったのですから。平蔵は荒木に「どこに住みたいか」と尋ね、「もし長崎なら、立派な家を与えよう」と語ったことが、カルロス・スピノラ神父の書簡に書き残されているほどです。

おわりに

長崎市夫婦川町に唐土山と呼ばれる山があります。今から370年ばかり昔、この麓にはトードス・オス・サントスというイエズス会の教会が聳えており、唐土山の名もこの教会の名に由来したと言います。現在この教会跡には春徳寺という禅宗寺院が建っていますが、ここに末次氏の墓所があります。墓石は今ではすっかり磨滅して判読も困難ですが、明治の末、川島元次郎氏が解読したところによれば、一基は「永安院殿通玄宗徹居士」すなわち春徳寺創建の功労者である末次平左衛門茂貞のものであり、また一基は「瑞光院殿壽岳浄永大姉」すなわち平左衛門茂貞の妻のものであります。つまり平蔵政直の息子夫婦の墓なのです。では残る一基が茂貞の父末次平蔵政直のものでしょうか。しかしこの一基は当時においてさえ磨滅が甚だしく、今となっては誰のものであるか明らかにはし得ません。そのかわりと言ってはなんですが、この平蔵の石棺であったというのが不気味な伝説と共に長崎に残されています。この春徳寺の裏の山道を登りつめると、そこが唐土山の頂です。そこは巨岩林立する奇景をなしており、その中に一つとりわけて奇妙な岩のかたまりがあります。それは縦に細長く削られており、中には不動尊が祭られています。これが平蔵の石棺となるべき筈の岩塊であったと言います。石工たちはこれに「雲證院殿華嶽浄皎居士」すなわち平蔵の戒名を刻しました。ところが、その刻字から血が滲み出したというのです。石工たちの恐れること甚だしく、作業は中止され、その跡が今に残されたと伝えられています。当時のイエズス会信徒たちに言わせれば、それは背教者であり迫害者となった平蔵に対する「神の懲罰」の奇蹟でもあったのでしょうか。

今この石棺の前に立ち、血を流したというその戒名を捜そうとしますが、これも磨滅のためか遂に発見することができませんでした。平蔵の名はこの石のかたまりからも拭いさられていたのです。今や不動の祠と化しその不様な姿を長崎の海にむけて立ちつくしているその岩塊は、神に呪われ今なお暗い海原を漂い続けるという、あの「さまよえるオランダ人」、そのふてぶてしささえ感じさせるようでした。（了）

